▲この練習の一投一投が明日の記録につながる。林さんはたゆみない努力を続ける。

ミュンヘンへの道

県立熊本工業高校

林　香代子さん（17歳）

林さんの大柄な身体が伸びる。右腕が勢いよく突き出される。砲丸が大きく弧を画いて飛ぶ。

熊本工業高校。放課後、陸上に、ラクビーにとグランドに若さをぶっつける青春の群像。その中で、彼女はミュンヘンへの道程を確かめるように黙々と砲丸を投げていた。

長洲中学二年の時、初めて砲丸を手にした彼女は、その僅か4ヵ月後に行なわれた放送陸上記録会で、13㍍09の記録を出し全国1位と逸材ぶりを披露。3年の時、県大会で出した16㍍16の記録は、現在も日本中学記録としてまだ破る者はいない。

高校に入って、投てきのベテランである西田親さん（県庁勤務）に、マン・ツウ・マンによる指導を受けるようになって技術的に一段と成長。去年のインターハイでは、砲丸ばかりでなく、円盤投げでも優勝という抜群の力をみせている。

3人兄弟の長女。"料理や裁縫などが好きなんですけど勉強と練習で暇がなくて…„ 泥に汚れた砲丸をいたわるように布で拭きながら話す姿に、女らしさが溢れている。

現在の目標は、まずアジア大会に出場すること、と頬を赤くほてらせる彼女に、コーチの西田さんも、"最近、ようやく欲がでてきました„ と目を細める。

素晴らしい素質プラスたゆみない努力。記録への挑戦に彼女は青春を爆発させているのである。

▲「ここでスナップをきかせて……」コーチの話に、部員と一諸に聞きいる林さんのまなざしは真剣だ。

話のくずかご

熊本の観光を考える（その5）

キセルでせなかを

沖津正巳

福士幸次郎（だったと思う）の詩のアタマだけを覚えている。

キセルで背中を　かく味を
知らねえような　奴なんだ

夏ならば、ヒヤリとした味、冬ならば、きざみを吸ったあと、残る暖みで、かゆいところに手がとどく、その味を私が知っているわけではない。

しかし、「うたの心」はわかるような気がする。私もそんなトシである。

キセルはオヤジのものであって、パパのものではない。オヤジの説教には、小道具としてキセルが物を言った。あれでパン、パンとやれば女房以下、平身低頭した。

往時、オヤジは気分上等だったに相違ない。

日本が再び大陸海軍を持つことがあっても、父親が再びキセルを握って、往時の如き権勢を振うことは、まずあるまい。

昔のオヤジはまず、どなって、それから叱る内容を考えた。いまのパパは怒るべき内容分析しているうちに、どなる元気が蒸発する。

オヤジの象徴としてのキセルを取り戻した（それを握りさえしたら、どんなことでも、どなり、説教し、絶対服従さすことができる）としたら、まずわれわれは何をなすべきか。

「オイ。若いの。君のアタマ、それは何だ。もっと、サッパリと、上の方まで刈りあげろ。パン、パン」

あなたは、若者のアタマ、後の方が、やたらに長いのをみて、抵抗を感じませんか。何ともなければ、あなたは若い。

若者は、うしろの方を刈りあげるアラカンスタイルを死ぬほど嫌う。

「しかし」と、このことを話題にしたとき私の若い友人が言った。「昔のチョンマゲはカッコいい。」

全日本剣道選手権大会をテレビで見ていた拙宅の娘が、そのカッコの素晴しさをほめ、「審判の人もハカマをつけたらいいのに」と言った。どうやら、ずっと昔からのものはカッコよくて、自分たちの父親が現在共有するものは全部カッコダメと思っているらしい。

「おじさんたちが、若い人、ことに十代が自分をどう見ているかを知りたいならば……」と別の若い友人が言った。

「本来の年を一・五倍して、そんな年齢差を観念していただくことが、若い世代とつきあう上では有益です。それを逆に、割引して〝若い気分でつきあおう〟などという気を起こすので、アヤマチが起こります。」

「ウーム。それでは、オレは七十八歳か。それはひどい。」と私は主張して、やっと、一・二倍に値切った。

「以前、私の住んでいるところは〝鷹匠町〟といいました。私はこの町名が、とても好きでした。おさむらいが、チョンマゲつけて、このへんを、いばって歩いていたかっこうを想像するのは、とても楽しいことですから」と、ことし、成人式を迎えたばかりのお嬢さんが私に語った。私は感動した。

古いものを大切にすることに、若い人も異存はないのだ。それを、「いまの若い世代にはわかるまい。不便だろう」で、下手に歩みよる、それがいけないのだ。

この世には、天才があって、その創造するところは老若の好みを越えて、圧倒的だ。

われわれのなし得ることと言えば、飛躍とは言えない歩みより、それも、せいぜい、二、三割程度。私自身で言えば七十歳から五十歳への歩みよりだから、落着くところアラカンスタイルだ。

「くまもと」とわれわれの郷土の名を唱えたあと、「子供の国」、「青年の国」、「老人の国」の三つをあげたら、連想ゲーム、どの一に結びつくであろうか。

「熊本は大人（おとな）の国」

私はそう言うことにきめている。われわれの風土が、古いものを大切にする、その自信のほどを念じ、天才を活かし、才能を伸ばすに寛容であることを期待してやまないからだ。

（佐竹商店取締役支配人）